

## 理想の我が家を求めて：

*A Handful of Dust*におけるTony Lastの世界

山 崎 麻由美

In Search of Transfigured Hetton Abbey : The World of  
Tony Last in *A Handful of Dust*

Mayumi YAMASAKI

## SUMMARY

Tony Last in *A Handful of Dust* is a happy domestic man, who has got enough money and loves his estate. He is kind to his beautiful wife and proud of his son and heir. Hetton Abbey is where he has grown up and he is hoping that in his son's day his house would recover its fame.

We gradually get to know, however, that Tony loves Hetton alone and he is playing the role of Victorian patriarch. His wife Brenda leaves him soon after their only son died in an unfortunate accident. She understands that to Tony, Hetton comes first and he needs all other things, including her, to help Hetton prosper.

After his son's death, the world seems to be against Tony. He, therefore, has sailed for Brazil in search of a City, which he pictures as transfigured Hetton in his mind. Instead of arriving in the City, Tony is captured and made prisoner by illiterate Mr Todd who loves Dickens. Every day Tony has to read aloud Dickens's works for him and there is no hope to go back to Hetton. It is a kind of punishment for his selfish love for Hetton and himself. However, it can also be said that his dream to shut out the outside world has been, in a sense, realized.

## 序

*A Handful of Dust* (1934)の主人公Tony Lastには過酷な運命が待ち受けていた。物語が始まるまでの彼の人生はまず順調で、美しい妻Brendaと一人息子のJohn Andrewを愛し、幼い頃から育つ

た屋敷Hetton Abbeyの維持に心を砕きながら満ち足りた人生を送っていたのである。彼には人から妬まれるほどの才気も社会的地位もない。つき合うには退屈な人物であったが他人に悪意を抱くことはないし、世間から眉をひそめられる言動もない。その凡庸な彼の人生は妻の浮気を発端とし

て思わぬ方に転がり、ブラジルの奥地で囚われ人となり、異常な老人Toddに来る日も来る日も Dickensの作品を読み聞かせるという生活を余儀なくされるのである。

James F. Carensは、TonyはEvelyn Waughの作品の中で「犠牲者」と呼べる主人公であると言う。彼は周囲に翻弄されたあげく、最後にHettonに戻ることにすら許されなかったからである<sup>(1)</sup> 19世紀の小説に見られる伝統的な主人公——高潔で意気軒昂たる人物——は20世紀の小説では影をひそめ、代わりにTony Lastが代表するような“anti-hero”が登場する。Carensの言葉を借りると“anti-hero”とは“...the man to whom things happen; and the things that happen to him often do so without rhyme or reason...”<sup>(2)</sup>である。A *Handful of Dust*の登場人物中、Tony Lastだけが生きる上で目的を持ち秩序を重んじる生活していたので<sup>(3)</sup> なおさら謂われぬ犠牲者であるという印象が強くなっている。もっとも彼の人生の目的は「家を維持し息子に継いでもらうこと」とささやかで表層的なものであり、人間としての深みがないことは否めない。しかし生き甲斐が取るに足りないものだとしても、凡庸で善良なTonyがブラジル奥地で囚われの身となってしまうのは厳しすぎる運命ではないだろうか。周囲に翻弄される「犠牲者」として彼には、なす術がなかったのだろうか。本稿ではA *Handful of Dust*の世界を彼が愛していたHettonと彼を取り巻く人物との関わりを鍵に読み解き、Tonyの運命が果たして理不尽だったのかを検証していく。

## 1 内側の世界と外側の世界

Waughの作品では「家」が重要な意味を持つ<sup>(4)</sup> A *Handful of Dust*も例外ではない。Hetton Abbeyが作中大きな役割を果たしていることは作品の章立てにも現れている。A *Handful of Dust*を構成している7章の内、次の各章タイトル——I章Du Côté De Chez Beaver (「ビーバーの家の方へ」、

III章 Hard Cheese on Tony (「トニーの不運」、V章 In Search of a City (「都市を探して」、VI章 Du Côté De Chez Todd (「トッドの家の方へ)——を見るだけでTonyの不運をたどることができる。つまりBeaver親子がHettonに入り込み、息子の事故死という不運な出来事が発端でTonyは苦境に立たされ、“a City”を探す旅に出た先でToddに囚われてしまうのである。そして上記章の間にはめ込まれた形のII、IV、VIII章の章タイトルにはHettonを意味する言葉“English Gothic”がつけられ、Tonyの人生にHettonが深く関わっている様を表しているのである<sup>(5)</sup>

Hetton Abbeyはかつて素晴らしい屋敷であったが、1864年にゴシック様式で建て直されてからは非常に評判を落としてしまった。その地方のガイドブックにも“devoid of interest”<sup>(6)</sup>と紹介されているくらいである。しかし彼には屋敷のすべてが“all these things with which he had grown up were source of constant delight and exultation to Tony; things of tender memory and proud possession” (15)であった。Tonyの人生はHettonと共にあり、彼の生活はHettonを中心にまわっていた。彼は伝統的なイギリスの地主であることを望み、noblesse obligeを果たそうと努めている。息子のJohn Andrewが立派な紳士となりHettonを継いでくれることが彼の願いである。そのため息子にも使用人に対する義務や態度を教え込もうとし、乗馬に長け狐狩りを好むようにさせたいと考えている。Tonyの頭はHettonの修復と改善の計画でいっぱいであった。そのために収入の大半をつぎ込んでいたので、Last家の日常生活は非常につましいものであった。Brendaはロンドンに出向く時も列車の運賃割引のある水曜日に三等車で行かなければならなかったし、衣装も金持ちの友人のお古を買ってやりくりしていた。離婚の慰謝料をめぐるTonyがBrendaと戦うことにしたのも、彼女の要求額が大きすぎてHettonを手放す羽目になりそうだからである。Hettonを売却

するようBrendaの兄にあからさまに仄めかされて、Tonyは自分のGothicの世界が駄目になってしまうと理解する(151)。それはTonyにとって耐え難いことであった。そして常々“I don't happen to want to go anywhere else except Hetton.”(149)と言い切っていたTonyが外国への旅立ちを決意したのも、Hettonを彼から取り上げようとする知人達から逃れたかったからである。

Tonyはクラブで偶然出会ったDr Messingerの誘いでブラジル探検に同行することになる。“a City”を探しに行くというDr Messingerの言葉がTonyの心を捉えたのである。心の中で“a City”を反芻する内に、彼にとって求める都市はゴシックの特徴を持つ理想化されたHettonとなっていく(160)。これが痛烈な皮肉になることは、たどり着いた先が彼の終生の牢獄となるToddの家だったことで明らかにされる。つまり彼はブラジルで理想のHettonを探し求める旅を続けた末に自らの自由を失ってしまったのである。

TonyにとってHettonは心の拠り所以上のものだった。彼の「聖域」<sup>(7)</sup>であり、生きる目的であったのだ。元来「家」というのは同じ場所であって外の世界に対して内の世界を形成する場である。TonyにとってのHettonも自分の世界を楽しむ場所であった<sup>(8)</sup>。しかしHettonはTonyを守りきることができず彼をToddの家へと送ってしまう。なぜHettonはTonyの安全な避難所とならなかったのだろうか。Helena(1950)でWaughはConstantineにローマ帝国の周りにめぐらされた壁について次のように語らせる。“I love the wall. Think of it, mile upon mile...a single great girdle round the civilized world: inside, peace, decency, the law, the altars of the Gods, industry, the arts, order; outside, wild beasts and savages, forest and swamp, bloody mumbo-jumbo, men like wolf-packs.”<sup>(9)</sup> このように堅牢な壁が外の残忍な者どもを寄せつけず内なる秩序を守るならば、内に暮らす者は安泰である。しかしHetton

はTonyの生活から、外敵の侵入を防ぐことが出来なかった。A *Handful of Dust*ではHettonがTonyにとっての「内」の世界を形成している。一方「外」の世界はロンドンであり、そこに暮らす裕福で軽薄な都会人がTonyの外敵、つまり現代の“savages”を表しているである。Tonyの生きる20世紀では秩序を壊す外敵が悪漢でもなく野獣でもない普通の人間であるために、内と外を分ける基準が曖昧になっている。そのため外から内側に入り込むのはさほど困難でないのである。

伝統的な地主の生活を送ろうとするTony<sup>(10)</sup>の一番の敵は20世紀の生活様式を持ち込もうとするMrs Beaverであろう。彼女の仕事は内装の請負や室内調度品の販売である。彼女はやり手で商売の機会を逃さない。息子のJohnがBrendaと親しくなったのを知ると、早速そのことを口実にHettonに乗り込んで現代風に改装させる機会をつかもうとするのである。Mrs Beaverという名前も象徴的である。勤勉に木を切り倒して自分の住まいを作るビーバーの姿に、他人の家を切り崩して自分の商売を広げようとする彼女の姿を重ね合わせることができるだろう。彼女やBrendaのロンドンの女友達は皆Hettonの住み心地の悪さをあからさまに非難し、Tonyの古くさい生活ぶりを嘲笑するのである。彼女たちのしゃべる言葉をTonyは理解できない。“they [the women] had the habit of lapsing into a jargon of their own which Tony did not understand.”(80)彼女らは彼とは全く異世界に住む者達であったのだ。

Tonyにとっての不運はBrendaがHettonを嫌っていたことであった。彼女は初対面のJohn Beaverに“I detest it...at least I don't mean that really, but I do wish sometimes that it wasn't all...so appallingly ugly”(36)と打ち明ける。彼女にはTonyがHettonに夢中になる理由がわからないというのである。Brendaの“We could never live anywhere else”(36)という言葉にはHettonに住み続けたいと願うTonyと異なり、そ

こから逃げ出したい気持ちが表れている。“the imprisoned princess of fairy story” (57)と表現されているBrendaは愛人Beaverの手を借りてHettonから逃げ出し、Beaverの母親を始めとする都会人達をHettonに侵入を手引きしたのである。

## 2 疑似家族と家庭の崩壊

Tonyの友人Jock Grant-MenziesはJohn Beaverに“Tony Last's one of the happiest men I know. He's got just enough money, loves the place, one son he's crazy about, devoted wife, not a worry in the world.” (12)と話している。この時点ではTony自身も幸福な家庭人としての自分を疑ったことはなかっただろう。しかし彼の幸福はJohn BeaverのHettonへの侵入と同時にひびが入っていくのである。しかし相手がBeaverでなくてもBrendaはいずれTonyを裏切って出ていっただろう。彼女の寝室の名にKing Arthurを裏切る妃“Guinevere”がつけられていることも象徴的であるし、Mrs Beaverの洞察通り彼女は“Wasted on Tony Last, he's a prig...it was time she began to be bored” (9)だったからである。このようにあちこちがたが来ているHetton同様、表面的には円満なLast家の家庭生活は綻び始めていたのである。

その危うい夫婦関係をつなぎ止めていたのは彼らの一人息子John Andrewであった。彼はTonyにとっては大切な跡取り、Brendaにとっては溺愛する息子であった。John Andrewは多少わがままではあったが、少年らしい率直さと洞察力を兼ね備えており紳士のスポーツ狐狩りにも興味を持っていた。そのまま育てば彼はTonyの理想とする当主となったかもしれない<sup>(11)</sup>しかし、TonyもBrendaも息子を愛しているように見えて、実は親の役割をきちんと果たしていないのである。John Andrewの養育は乳母に任されていたし、乗馬の訓練は馬丁のBenに任せきりであった。子

どもの養育に親が直接関わらないというのは上流社会では珍しいことではない。しかしLast家の場合は乳母とBenが両親の役割も担っていた。普段は乳母とBenがJohn Andrewをしつけていたのである。John Andrewは特にBenを慕っており、乗馬の練習の合間にBenの話を熱心に聞く。彼にとってBenは崇拜する人間だった。またBenも若主人に媚びることなく、Tonyに失礼な態度をとるJohn Andrewを“You ungrateful little bastard” (78)と叱る。Benの言葉遣いや態度は粗野であるが、Tonyが息子をたしなめようとして失敗する場面と比べると、強い導き手としての存在感がある。また乳母にしてもBrendaよりもJohn Andrewの言葉遣いや振る舞いに気を配っている。暴言を吐くJohn Andrewを乳母はBrendaに言いつけるが、Brenda自身はJohn Andrewを叱ろうとしない。「自分よりもあなたの方がそういうことは上手だから」とTonyに面倒な役目を押しつけてしまう(22)。そしてTonyはJohn Andrewをうまく諭すことはできないのである。

狐狩りでJohn Andrewが命を落とした時、乳母は悲しみで目を赤くする。一方Brendaは「Johnが亡くなった」という知らせを聞いた時に咄嗟に愛人のJohn Beaverのことだと思い込み動揺する。そのすぐあとで息子のことだとわかると“Thank God”と言って泣き伏すが、その言葉と涙には愛人が無事だったことを安堵する気持ちが多分に含まれていたのである。そのためBrendaは知らせを持ってきたJockに対して自分の失言を取り繕わなければならない(119)。TonyはJohn Andrewの遺体から離れたくないのでロンドンへ出向くことは出来ないと言う。しかしそれは凶事を知らせた際のBrendaの悲しみに直面することを恐れたための言い訳とも考えられるのである。なぜなら息子が亡くなってから“I don't like to leave John.” (109)と言った以外は、哀悼の気持ちを彼の言動のどこからもくみ取ることができないからである。彼が気にしているのは、息子を亡くした父親とし

て果たすべきことはきちんと出来ているかということだけなのである。またTonyとBrendaは息子の事故について、あるいは息子を亡くした悲しみについて語り合うことはなかった。John Andrewはこの世を去るとその存在はすぐに夫婦の間から抜け落ちてしまったのである。

Hettonでの親子の絆のか細さは、Old Hundredthといういかがわしい酒場にいる娼婦Millyがその娘Winnieにかける愛情と対照的である。Millyは16才でWinnieを生んだが父親は誰だかわからない。現在は娘をよそに預け、時々面会する生活である。しつけや教育面では放任のようだが、娘を思う気持ちはTonyやBrendaよりも真摯である。離婚裁判の証人作りのための偽装旅行でTonyがMillyを伴ってブライトンに出かける際、MillyはWinnieを連れてきてしまう。同行の探偵にも渋い顔をされるのだが、Millyは意に介さない。事前打ち合わせでTonyに娘を連れてくることはならぬと言われていたにもかかわらず、彼女は娘を連れてきてしまうのである。Millyの厚かましい行動に娘を海辺の保養地に連れて行ってやりたいという親心を感じ取ることが出来る。

不器量でこましゃくれたWinnieの存在はTonyに欠けているものを浮かび上がらせる。彼は当日待ち合わせの駅に来たWinnieに帰るように言うが説得できず、結局彼女を同行することになる。それは優しさというよりは毅然とした態度がとれない彼の弱さの表れである。誰に対しても決然たる態度を取ることができないTonyは、そのために厄介ごとを背負い込んでしまうのである。WinnieとMillyの名前から連想する“willy-nilly”はまさしくTonyの欠点のひとつなのである。ブライトンで彼はWinnieの父親と間違われ非難される羽目になる。彼はMillyの代わりに、朝Winnieを海岸に散歩に連れて行った。Winnieが泳ぎたいと言ったため、Tonyが海岸の案内係に「泳げるだろうか」と尋ねると、「こんな時に泳がせるなんてなんてひどい父親だ」と散々罵られてしまったので

ある。彼がJohn Andrewを狐狩りに参加させ、そのため彼を亡くした時は、居合わせた人びとが  
“It wasn't anybody's fault. It just happened”  
と口々に言う(105-106)。息子を見守るべき父親の役割を果たさなかったTonyを非難する声は拳がらなかった。今Winnieの父親として受けている非難“*Unnatural beast*”(144)は本来John Andrewが死んだ時に受けるべきものであったのだ。

### 3 Toddの家にいたる旅

Waughは“Fan-Fare”で*A Handful of Dust*は最後の場面を頭において書き始めた小説だと述べている<sup>(12)</sup>元になったのは短編“The Man who Liked Dickens”(1933)であり、登場人物の名前こそ変わっているが内容はほぼ同じ、主人公がブラジル奥地に迷い込みそこで助けてくれた人物は文盲だがDickens好きで、主人公はその「恩人」のために死ぬまでDickensを読み続ける運命になってしまうというものである。この結末は現実には起りそうにない状況である。20世紀の文明社会に住んでいたTonyが次元の違う世界に入り込んでしまったような印象を受ける。実際Tonyがブラジル奥地に進んでいくにしたがって現実味は薄れ、寓話色が強くなっていく。寓話への分岐点となるのはJohn Andrewの死である。John Andrewの死を境にTonyを取り巻く世界は彼と少しずつ敵対していき、彼がHettonで平和に暮らすことを危うくしていく。そのため彼は自分の理想郷“the City”を見つけるために、Hettonを後にせざるを得なくなっていくのである。

John Andrewの死後、寓話にふさわしい象徴性を帯びた人物が新たに登場してくる。まず、Tonyの欺瞞を読者に暴くMrs RatteryがTonyの前に姿を現す。John Andrewが亡くなった時、Brendaがロンドンから戻ってくるまでMrs RatteryがTonyに付き添うことを申し出る。Mrs RatteryはJockの愛人で共に狐狩りに招かれ、John Andrewの死に遭遇したのだ。彼女は“Shameless Blonde”

の渾名でTonyとBrendaの会話に登場していたものの、この時が初対面であった。TonyはMrs Ratteryが軽薄な女ではないかと想像していたのだが、実際に会った彼女は常識的な立ち居振る舞いの女性であった。彼女はアメリカ生まれであったが、何らかの理由で現在は国籍を剥奪され国籍不明の人物となっている。また金持ちだが家を持たない女性である。“I never notice houses much.” (98)と言い、Hettonになんの感慨も抱かない。そして彼女は自家用飛行機を自ら操縦してHettonに到着する。土地や物品に縛られない自由な存在の彼女はTonyの対極に位置している。そのため彼女を通して彼をこれまでとは違った視点で見ることが出来るのである。またMrs Ratteryの名前から連想される“rat”や“ratter”は「密告者」「裏切り者」という意味をもつ言葉である。彼女との会話の中でTonyが実は偽善的な人物であることが明らかになっていくのである。

Mrs Ratteryと語る内に、彼の形式だけにこだわる浅はかさが暴露されていく。彼は毎週日曜に教会に通うのを欠かさなかったが、実はヴィクトリア時代の風習を真似しているだけで、礼拝中にHettonの改装のことを考えていたのである。彼はMrs Ratteryに今のような時に宗教の話が一番したくないのだと打ち明ける。またTonyは妻の衝撃を思い次のように語る。“It's going to be so much worse for Brenda. You see she'd got nothing else, much except John. I've got her, and I love the house...” (109)この発言から、TonyにとってはJohn AndrewはHettonと同じ価値であったことがわかってくる。また彼は他人を気遣う発言を繰り返す。特にJohn Andrewの死に直接関わったMiss Riponに対する同情は、寛大さを通り越して不愉快でさえある。息子の命より他人の目を気にしている様子が見え隠れするからである<sup>(13)</sup>。このようにMrs Ratteryは読者に新たな角度からTonyの一面を見せるのである。そして彼女は翌日Tonyの知らぬ間にHettonを発ち、

その後姿を現すことはない。

またMrs Ratteryの善意が裏目に出てTonyは使用人に対して評判を落としてしまう。彼女はTonyの気を紛らわそうとゲームに誘うのだが、しぶしぶゲームを始めた彼が動物の鳴き声をまねしている時に下男にそれを目撃されてしまう。彼は主人が不謹慎であることを仲間に言いふらす。下男達に陰口をきかれたTonyが次に誤解され非難されるのは、先に述べたWinnieと親子に間違われる場面である。子どもを泳がせて構わないかと尋ねただけなのに、人びとの口から口へ伝えられ、怪物を見るように後をぞろぞろつけられ罵られてしまう。更に「朝食を二度食べた」とWinnieが執拗にTonyをなじるのを耳にした野次馬達までが、「朝食を二度食べるなんてひどい奴だ」と非難するにいたっては尋常ではない。彼らの非難に対してTonyはひと言も抗弁しない。またBrendaへ払う慰謝料のことを彼女の兄Reggieと話し合う中、TonyはReggieから“vindictive”な性格であると非難される。そしてBrendaの母親からはTonyがBrendaを蔑ろにしたから娘は浮気をしたのだと決めつけられてしまう。このようにJohn Andrewの死後、世間はTonyに冷たくあたる。Tonyの立場に立ってみれば世間の目はあまりにも不当であろう。しかしMrs RatteryによってTonyの偽善的な生き方が現れてくると、Tonyが世間から爪弾きにされ疎外されていくのも不思議ではないと考えることが出来るのである。

Tonyがブラジル探険を決めたのは、Dr Messingerと出会いその話に魅せられたからであった。Dr Messingerは名前から想像がつくように「使者」の役割を果たしている。Tonyの心を特に惹いたのはDr Messingerの語る都市の様子だった。Tonyの中でいつしかthe Cityは“transfigured Hetton” (160)となっていく。こうしてTonyの心をつかんだDr Messingerの役割は彼をToddの家に導くことである。それ故、彼は船の上でTonyがうら若いThérèseと仲良くなるのを嫌う。彼がThérèse

と恋に落ち、彼女の故郷トリニダッドで下船してしまうことを恐れたのである。逆から見ればThérèseはTonyにとって文明社会につながり止めてくれる最後の人物だったのだ。しかし彼が既婚者であることがわかるとThérèseは目に見えて冷たくなる。寄港さきで下船した際に二人で買い求めた魚の剥製を忘れてきてしまうが彼女は「構わない」と意に介しない。魚が復活を象徴することを考えると、この時点でTonyの復活の機会は失われ、彼がToddの家に行くことは決定的になったのである<sup>(14)</sup> TonyをToddに委ねる地点まで来るとDr Messingerの役割は終わり、滝にのまれて文字通り姿を消す。たかだか3メートルの滝から落ちたくらいで、“they [the falls] were enough for Dr Messinger.” (197)とあっけなく命を落とすことは、彼がTonyにとって象徴的な人物であることを表しているのである<sup>(15)</sup>

Dr Messingerに導かれてブラジル奥地へと進んでいく内に時間と空間が現実世界から徐々に切り離されていく。Tonyがイギリスの時間から切り離されていく第一段階はブラジルに向かう船上である。イギリスでの生活に思いを馳せている最中に、彼は時差があることを思い出す。イギリスの時間の方が進んでいるので、彼が今過ごしている時間はHettonを嘲笑した女たちが使い古した後の時間だと考える。次に奥地で原住民達に出会った後、時間の観念がずれてくる。片言の英語を話すRosaは時制が不正確で、未来のことも過去のことも現在形でしか話さない。原住民達に筏を作らせている時にいつ完成するのか尋ねても“Just now”としか答えないのである。またその後マラリアに罹り高熱に浮かされるTonyは幻覚で“time is different”と彼に向かって言われるのを何度か聞き、彼自身もうろうとした意識の中でToddに“I will tell you what I have learned in the forest, where time is different.” (207)と話しかける。

現実社会から時間がずれていくのと同時に空間

も現実離れをしていく。Dr Messingerはある地点で“From now onwards the map is valueless to us” (177)と言うが、そこから先は原住民が“water and evil spirit”に頼りながら夜営地を決めていくという場所である(180)。毒虫や吸血コウモリから身を守る術もない場所をDr Messingerの知識と勘だけを頼りに進んでいくのだ。Tonyが苦しみながら先へ進んでいるときに、イギリスではBrendaとJockはTonyの旅は安全だろう、“The whole world is civilized now...” (172)と話している。彼らの口調からTonyのいる場所がいかに彼らの認識から遠く離れているかを読みとることが出来る。やがてマラリアの幻覚状態で、TonyはBrendaや知人達が入れ替わり立ち替わり現れ混沌とした世界を展開するのを見る。こうしてTonyは自分が属していた文明社会では考えもつかないような体験をしてToddの家にたどり着くのである。意識が混濁していた彼がToddに助けられゆっくりと回復した時には、イギリスもHettonも彼の手の届かないところに去ってしまったのである。そしてToddによってTonyの腕から時計が盗られた時に、彼が文明社会の時間の流れとは無縁の世界に留め置かれることが確定したのである。

Toddはドイツ語の「死」を連想させる名前である<sup>(16)</sup> Todd のためにDickensを音読することだけが日課の生活は単調で、時間は肉体の死に向かって過ぎていくだけである。Toddから逃れることができないTonyにとっては、その家は牢獄であった。捜索隊はToddの家までたどり着きながら、彼の奸計でTonyは死んだものと思込まされる。そのためTonyは死んだ者としてHettonに記念碑まで建てられてしまうのである。Toddは、捜索隊が帰ったと知って呆然とするTonyに「次は*Little Dorrit*を読もう」と提案する。*Little Dorrit*は牢獄に暮らす一家の話である。Tonyにとってはこれからの生活を暗示している作品と言えるだろう。Toddの“*There are passages in that book I*

can never hear without the temptation to weep.” (217) と言う言葉を最後にTonyは読者の前から姿を消す。Toddのこの言葉は皮肉に響く。読者はTonyの置かれた運命を思う時に全く同じように感じるからである。

しかしToddの囚われ人となったTonyの人生が本当に理不尽な運命だったのかという疑問である。Tonyはヴィクトリア朝的な地主生活の再現を夢見ていた。家父長的な生活がTonyの理想だったのである。それはHettonを守り息子に受け継がせることであり、身分が下の者を庇護する義務を負っているという自負であった<sup>(17)</sup>。しかしその夢は20世紀のイギリスでは叶わない。Hettonという不完全な建築物には、都会からやってくる無秩序で奔放な人々の影響を拒み抗う強さがなかったからである<sup>(18)</sup>。またTony自身も上辺だけを取り繕う空虚な人物であった。だがToddは強い父親として生きている。彼はTonyに向かって、このあたりの原住民達は自分の意のまま動くことを伝える。“You realize...that they would do nothing without my authority. They regard themselves, quite rightly in many cases, as my children” (212)と告げる。彼はその地方にTonyが夢見た家父長として君臨していたのである。

Tonyは来る日も来る日も「Hettonに戻ることが出来ない」という絶望を抱えてDickensを朗読していただろう<sup>(19)</sup>。しかし父親が家族に読み聞かせることがヴィクトリア時代の家庭の習慣だったのである。実際TonyがHettonで妻や子に朗読をしていたことを思い出せば、Littlewoodが述べるように“His [Tony's] fate at the hands of Mr Todd is merely a confirmation of the part that has been his from the beginning. Reading Dickens among savages is a sardonic image of what Tony has been doing anyway in his attempt to maintain Hetton within the context of contemporary society.”<sup>(20)</sup> だったと言えるだろ

う。またDickensがヴィクトリア朝の俯瞰図ともいべき小説を書いた作家であったことを考慮すると、皮肉なことにTonyは帰るべき場所に戻ったのではないかとも思えるのである<sup>(21)</sup>。現代で叶わない夢が、時間の流れの違う世界で実現したということにもなるのではないだろうか。

## 結 論

Hettonに建てられた記念碑には“ANTHONY LAST OF HETTON/EXPLORER/Born at Hetton, 1902/Died in Brazil, 1934”と刻まれていた。Hettonで暮らすことに喜びを感じていたTonyにとって「探検家」と評されるのはさぞ心外なことだろう。Toddの家での幽閉は一見罪もないTonyにとって非常に理不尽な運命のように思われる。彼は家族と日々の暮らしを愛していただけなのである。しかし彼のその愛情の裏側には彼の自己中心的な考え方が隠されている。John AndrewはHettonを継ぐ駒のひとつで、Brendaは後継者を生む存在に過ぎなかったのである。John Andrewが亡くなって間もなく、Hettonを出ていくと言うBrendaにTonyは“We are both young. Of course, we can never forget John. He'll always be our eldest son, but...” (123-24)と次の子をもとうと仄めかす。しかしBrendaはTonyを遮り“Don't go on, Tony, please don't go on” (124)と言い、Tonyと共に未来を歩むのを拒否する。

結局Tonyは前世紀の地主の役を演じていたかったのである。彼はHettonを中心とした自分の世界しか愛せない。熱病のさなかでさえ彼の見る幻覚ではHettonが彼を待ち受けており、使用人に“The City is served” (203)と告げられる。彼は自己中心的な考え方で妻子を支配しようとした身勝手さのためHettonから遠く離れた場所でToddに囚われてしまったのである。しかし皮肉なことに彼は理想としていたヴィクトリア時代の生活をToddの家で実現したとも言えるのである。



## 注

- 1) James F. Carens, *The Satiric Art of Evelyn Waugh* (Seattle : University of Washington Press, 1966) 48.
- 2) Carens 46.
- 3) Carens 85.
- 4) Carens 24.
- 5) Robert Murray Davis, *Evelyn Waugh, Writer* (Norman, Oklahoma : Pilgrim Press, 1981) 75-76. 参照。
- 6) Evelyn Waugh, *A Handful of Dust* (London: Penguin, 1951) 14.  
以下同作品からの引用および言及にはすべてこの版を用い、本文中括弧内に頁数のみ示す。
- 7) Robert R. Garnett, *From Grimes to Brideshead* (Lewisburg : Bucknell UP, 1990) 106.
- 8) Garnett, 109. "At Hetton Tony can shut out the world and lead his own life among those he loves and trusts."
- 9) Evelyn Waugh, *Helena* (London : Penguin, 1963) 39.
- 10) Garnett, 106. "Tony is the last Victorian. Deliberately antiquated insulating himself at Hetton from the horrors of contemporary life, especially as they are concentrated in places like London, Tony is a refugee from the twentieth century."
- 11) Jeffrey Heath, *The Picturesque Prison: Evelyn Waugh and His Writing* (Montreal : McGill-Queen's UP, 1981) 111. "John Andrew possesses an inborn candour...but his saving bluntness is destroyed by Hetton's hollowly polite atmosphere."
- 12) Evelyn Waugh, "Fan-Fare" *Life*, 8 April 1946
- 13) Frederick J Stopp, *Evelyn Waugh: Portrait of an Artist* (London : Chapman & Hall, 1958) 93.
- 14) Richard Wasson, "A Handful of Dust : Critique of Victorianism" (1961) *Critical Essays on Evelyn Waugh* ed. by James F Carens, (Boston : G. K. Hall & Co, 1987) 140.
- 15) Stopp. 94. "Messinger is the 'messenger' from the nether-world of the Brazilian jungle, his task to bring Tony Last...to Mr Todd's remote settlement. This done, his death by drowning, accidental unmotivated, in a mere ten feet drop in the upper waters of an unnamed tributary of the Amazon basin, is quite logical."
- 16) Garnett, 117. "Critics have often noted the likely derivation of Mr. Todd's name from the German 'tod,' meaning death."
- 17) Tonyはそのような義務を "It's a definite part of English life." だと考えている。18.
- 18) Robert Murray Davis, *Evelyn Waugh, and the Forms of His Time* (Washington, D. C : The Catholic University of America Press, 1989) 67. "Tony's place of refuge is insubstantial and without real foundation, based on empty picturesqueness and private associations rather than a solid tradition."
- 19) 山田麻里『イヴリン・ウォー —— 「一握の塵」のテキスト間相互関連性』(日本図書センター、2004年)87. 「どの作品もトニーが戻ることを切望している祖国イギリスが生き生きと描かれ、囚われの登場人物であふれ、読者を涙ぐませるために書かれていることが、トニーの苦渋に輪をかける効果を上げている。」
- 20) Ian Littlewood, *The Writings of Evelyn Waugh*, (Totowa, New Jersey : Barnes & Noble, 1983) 96.
- 21) George McCartney, *Evelyn Waugh, and the Modernist Tradition* (New Brunswick and

London : Transaction Publishers, 2004 : originally published in 1987) 154. "Having attempted to escape the present moment by retreating to a comforting illusion of what nineteenth-century life was supposed to be, Tony finds himself lifted out of history. His grimly appropriate fate is to be trapped in a repetitive cycle of Dickensian grotesquery that mocks the make-believe world he had tried to establish for himself at Hetton Abbey."

### 参 考 文 献

- Amory, Mark, ed. *The Letters of Evelyn Waugh*. New Haven & New York : Ticknor & Fields, 1980.
- Beaty, Frederick L. *The Ironic World of Evelyn Waugh*. Northern Illinois UP, 1994.
- Carens, James F., ed. *Critical Essays on Evelyn Waugh*. Boston : G.K. Hall, 1987.
- . *The Satiric Art of Evelyn Waugh*. Washington UP, 1966.
- Cook, William J., Jr. *Masks, Modes, and Morals : The Art of Evelyn Waugh*. Fairleigh Dickinson UP, 1971.
- Davie, Michael, ed. *The Diaries of Evelyn Waugh*. Boston : Little, Brown, 1976.
- Davis, Robert Murray. *Evelyn Waugh, Writer*. Norman, Oklahoma : Pilgrim, 1981.
- . *Evelyn Waugh, and the Forms of His Time*. The Catholic University of America Press, 1989.
- Donaldson, Frances. *Evelyn Waugh : Portrait of a Country Neighbour*. London : Weidenfeld and Nicolson, 1985.
- Garnett, Robert R. *From Grimes to Brideshead : The Early Novels of Evelyn Waugh*. Bucknell UP. 1990.
- Heath, Jeffrey. *The Picturesque Prison : Evelyn Waugh and His Writing*. McGill-Queen's UP, 1981.
- Littlewood, Ian. *The Writings of Evelyn Waugh*. Totowa, New Jersey : Barnes & Noble, 1983.
- Lodge, David. "Evelyn Waugh" Stade, George, ed. *Six Modern British Novelists*. Columbia UP, 1974 : 43-86.
- MaCartney, George. *Evelyn Waugh and the Modernist Tradition*. New Brunswick, New Jersey : Transaction, 2004.
- McDonnell, Jaqueline. *Waugh on Women*. London : Duckworth, 1986.
- . *Evelyn Waugh*. London : Macmillan, 1988.
- Savage, D.S. "The Innocence of Evelyn Waugh" *The Novelist As Thinker*. London : Dennis Dobson, 1947 : 34-46.
- Stannard, Martin. *Evelyn Waugh : The Critical Heritage*. London : Routledge & Kegan Paul, 1984.
- Stopp, Frederick J. *Evelyn Waugh : Portrait of an Artist*. London : Chapman & Hall, 1958.
- Sykes, Christopher. *Evelyn Waugh*. London : Collins, 1975.
- Waugh, Evelyn. *A Handful of Dust*. London : Penguin, 1951.
- . *Helena*. London : Penguin, 1963.
- 山田麻里『イヴリン・ウォー —— 「一握の塵」のテキスト間相互関連性』日本図書センター、2004年